

柏市石揚遺跡出土土偶の再検討

安 井 健 一

目 次

1	はじめに	101
2	対象とする資料について	101
3	当資料を中心とした前期土偶の先行研究	102
4	関東地方の前期前半土偶の状況	107
5	他の土偶型式からの影響	109
6	大曲輪土偶型式の成立	111
7	東北・関東地方の初期土偶の変遷	113
8	おわりに	115

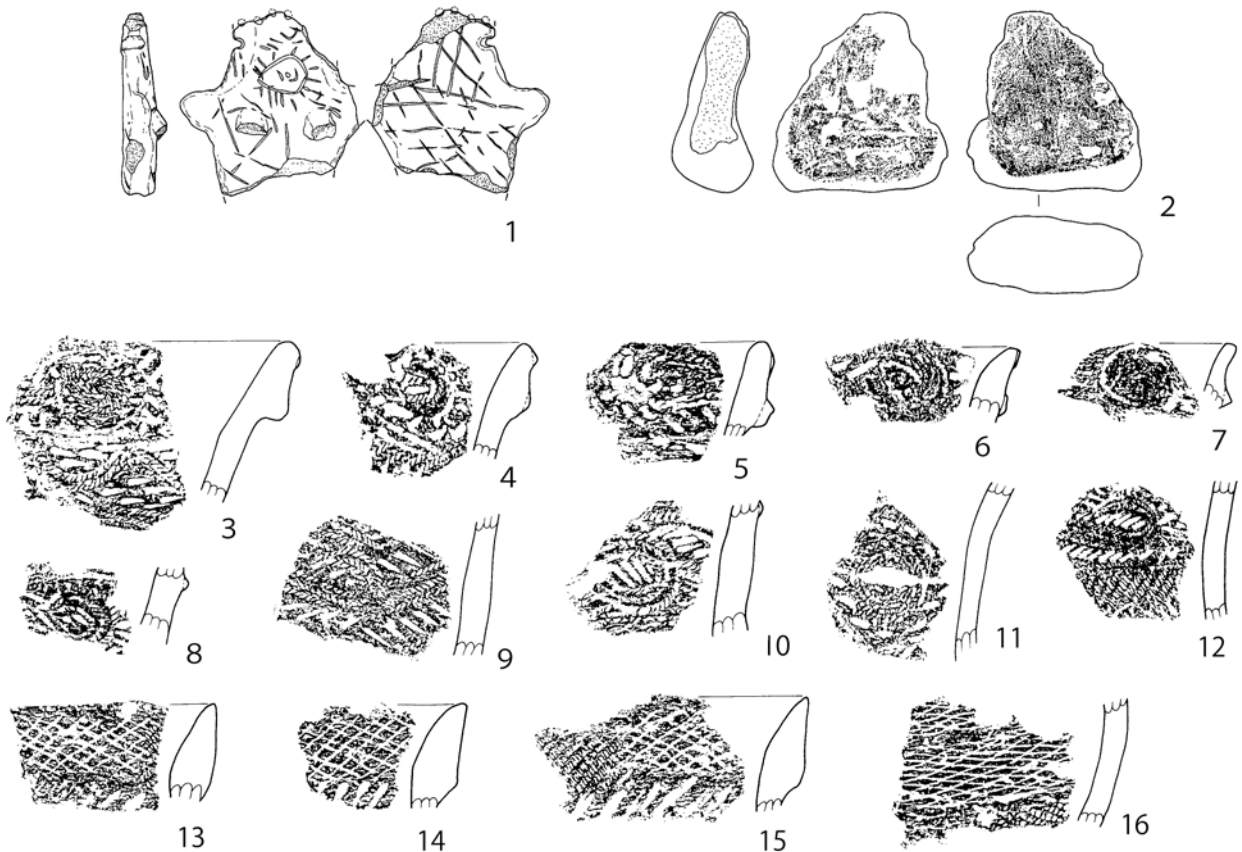
1 はじめに

本文において検討する資料は、柏市石揚遺跡から出土した縄文時代前期に位置付けられる土偶である。石揚遺跡は縄文時代早期後葉の条痕文期から後期初頭の称名寺式期にかけて存続し、特に前期初頭の花積下層式期の集落は県下でも有数の規模である。筆者は就職した最初の年に調査を担当し、報告書作成にも携わった^(註1)。しかしながら当時は花積下層式土器についても土偶に関しても知識は乏しく、考察はおろか、事実記載についても誤認に基づいた不適切な内容となってしまう。その後、前期土偶として希少な資料ということで、多く引用され現在に至っている。一方でその位置付けには多くの問題点が残されていると考える。筆者としてはこの資料を含む関東東部の初期土偶をまとめる機会もあり^(註2)、これを契機に今一度当資料について検討したいと考えるに至ったものである。併せて県内の前期土偶について、その位置づけを今一度再検証する試みでもある。

2 対象とする資料について

石揚遺跡は千葉県柏市泉に所在する。手賀沼の南側に位置する標高20m～22mの洪積台地上に立地し、手賀沼へ注ぐ小支谷が複雑に入り組んでいる。調査は平成元年（1989年）12月から平成2年（1990年）10月にかけて行われ、調査報告書は平成6年（1994年）に刊行された。縄文時代の調査成果として、早期後葉の竪穴住居跡4棟、炉穴約40基、陥穴22基、土坑17基、前期初頭の竪穴住居跡20棟、土坑11基、前期中葉の竪穴住居跡1棟、中期末から後期初頭の竪穴住居跡2棟、土坑69基などである。出土土器は早期の撚糸文土器から晩期の浮線文土器まで出土しているが、遺構群と同時期の早期後葉条痕文期から前期中葉と、中期末から後期初頭が圧倒的に多く、遺構外からも多量に出土していて包含層を形成している。土器以外の出土遺物は土偶の他、土器片錘や土器片円盤、多量の石器、玦状耳飾りなどの垂飾類が出土している。

第1図が検討対象資料である^(註2)。1は有文の板状土偶で、上下を欠損するものの十字形を呈し、頭部に当たるとみられる上側には4箇所穿孔が認められる。孔は丁度欠損している部分に当たっており、位置を考えると欠損の大きい右側にもあった可能性が強い。穿孔とは別に左側には円形の抉りが施されていて、右側にも存在したと思われる。胴部中央には乳房表現が認められる。頸に当たる部分には円形刺突とそれを丸く囲む沈線が二重に施され、その外側には短沈線が放射状に配される。胴部下半には正中線と思われる沈線が縦位に配され、周囲には斜行沈線が疎らに配される。裏面は斜格子状沈線がほぼ全面に施される。胎土にやや多量の植物繊維を含む。古墳時代初頭の方形周溝墓の周溝覆土からの出土であるが、具体的な位置は不明である。2は台形を呈する土製品である。板状ではあるが下部が膨らんで若干前方に突出している。上部と左側が欠損しているため全体規模は不明である。図では分かりにくい裏面と下面には貝殻条痕と思われる調整痕が認められる。胎土には植物繊維を多量に含み、表面は部分的に劣化が目立つ。遺構外の包含層から出土している。なお、報告書において側面図を中央に配していたが誤りである。本稿では正しい位置に配置している。ここからは主に1について検討することとし、2については最後に多少の検討を加えることとする。



第1図 石揚遺跡出土土偶・土製品・土器 (S=1/3)

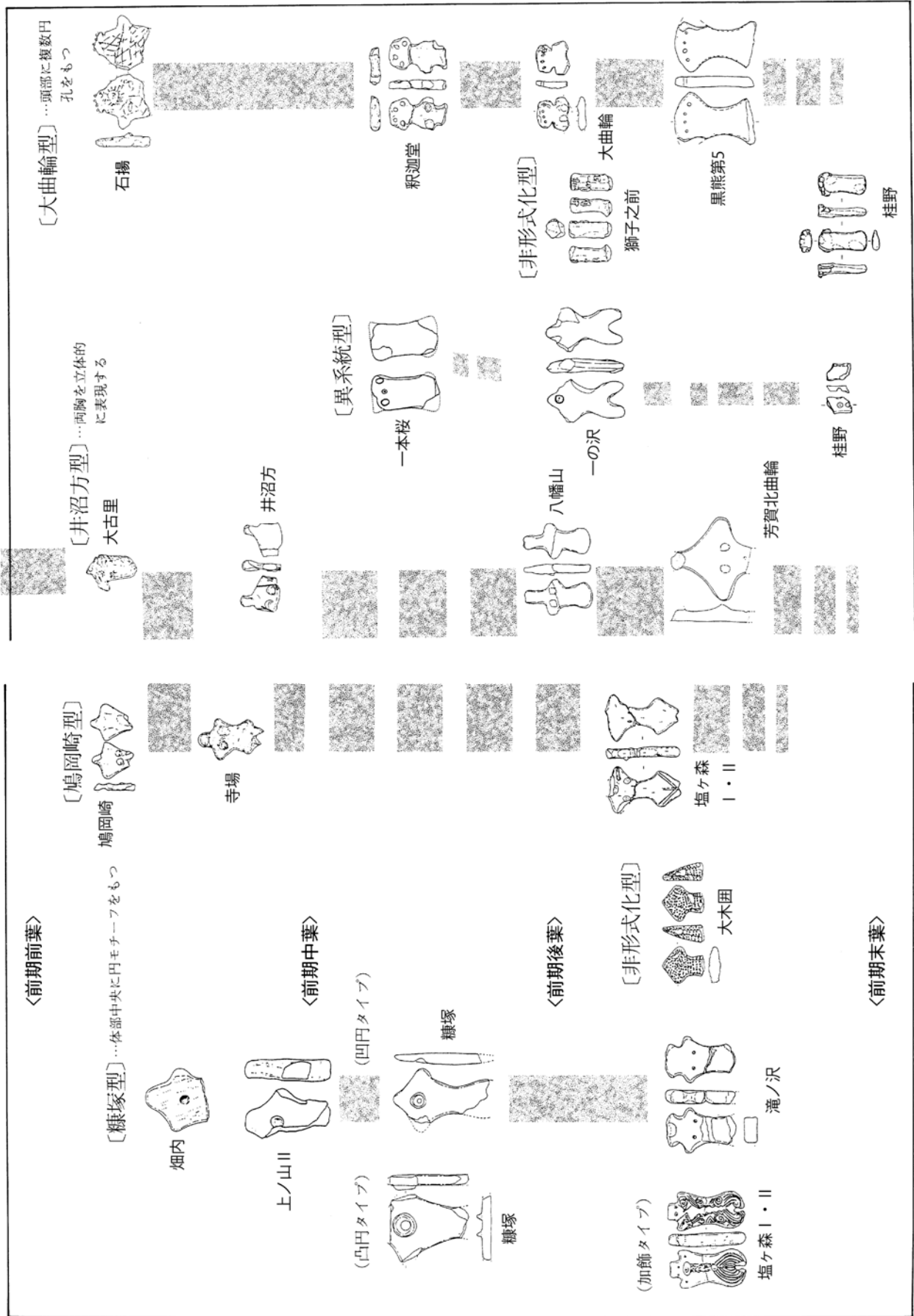
3 当資料を中心とした前期土偶の先行研究

前期以前の初期土偶の研究は、原田昌幸氏の一連の業績に負うところが大きい。今回の資料についても、氏が「大曲輪土偶型式」として定義した土偶型式の中に位置付けられている(第2図)^(註3)。大曲輪土偶型式とは、円形で扁平な頭部に4箇所あるいはそれ以上の穿孔がある板状土偶で、愛知県名古屋市大曲輪遺跡出土資料を標準型式とする。その分布は大曲輪遺跡を最西端とし、主に群馬県から山梨県にかけての前期中葉から後葉にかけて多く見られる。石揚資料は前期初頭に遡る可能性が大きく、最古のものと位置付けている。ただし時期決定に当たって、資料そのものに対する具体的な検証は示されていない。

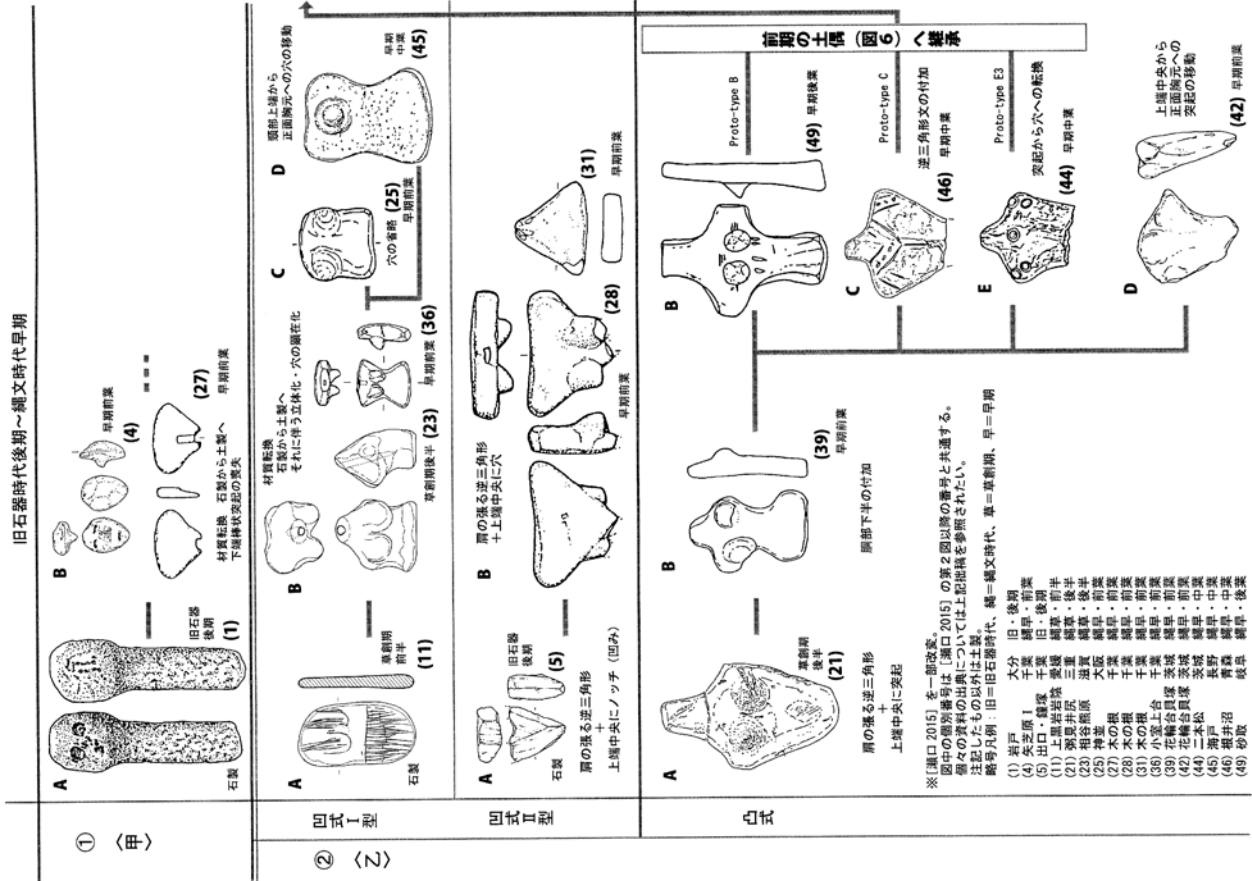
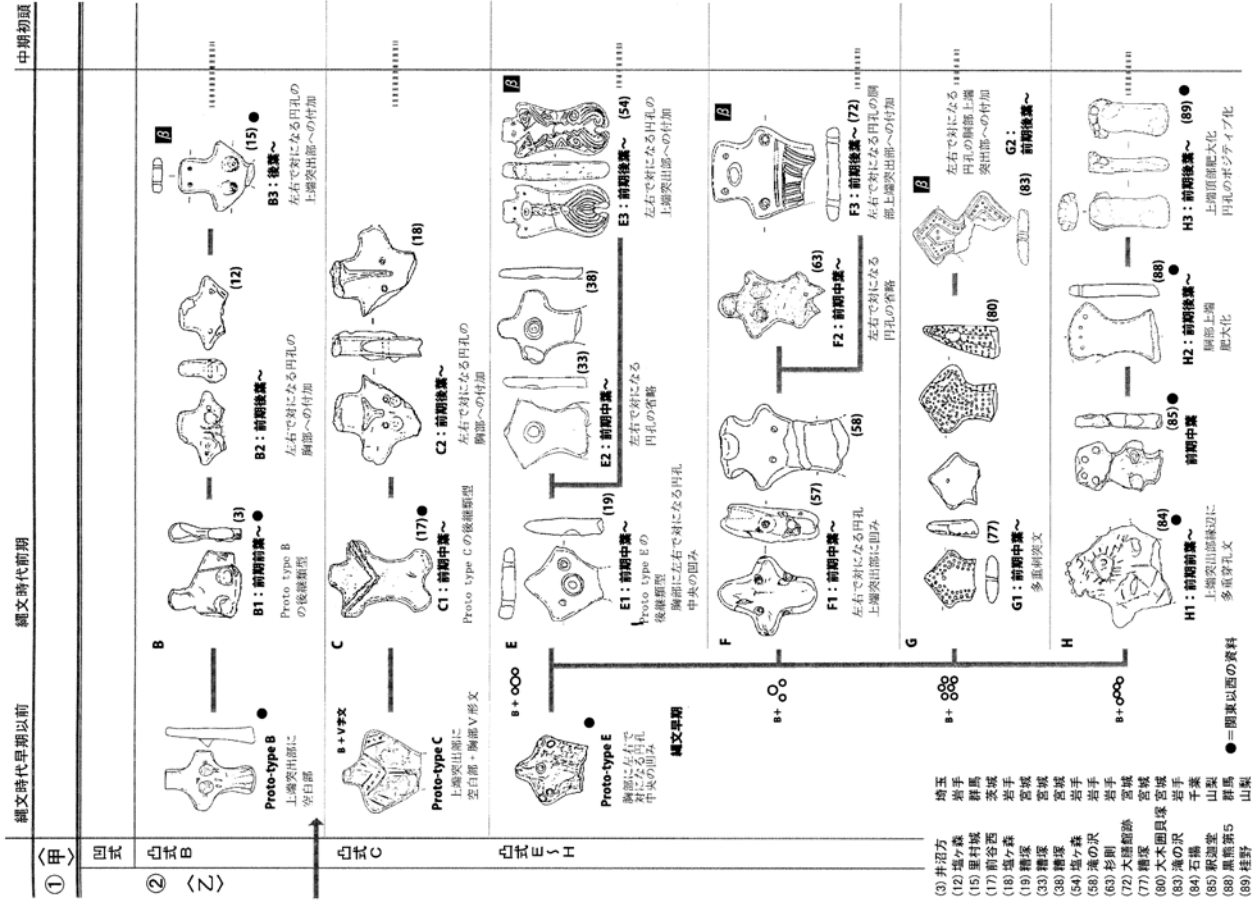
大曲輪土偶型式を含む前期土偶の変遷について、より詳細な編年案を提示したのは市川恵子氏である(第3図)^(註4)。原田氏の大曲輪土偶型式を「大曲輪型」と再定義し、「花積下層式期に出現し、若干の時期的空白をもちながら黒浜式期、北白川下層Ⅱ式(諸磯a、b)期、諸磯c式期と続く」として、石揚資料をその初源のものと位置付けている。ただしこれも石揚資料そのものに対する検証は示されていない。

瀬口眞司氏は原田氏の編年観を引き継ぎつつ、類型の間に埋もれている共通要素の抽出により初期土偶の本質に迫ることを目的として、顔面表現があるものと欠落するものにと類別した(第4図)^(註5・6)。詳細は後述するが、そのうち頭部に円孔が列状に付加される一群を設定し、石揚資料は其中最も古く前期初頭に位置付けられるとした。早期土偶からの系譜を辿れるものとしている。資料そのものに対する検証は示されていないのは前掲論文と同様である。

近江哲氏は、原田氏の「大曲輪土偶型式」を継承した上で、石揚資料について位置付けが難しいとしつ



第3図 前期土偶の変遷模式図 (市川 1999に加筆、縮小)



第4図 初期土偶関連資料の類型と組列 (瀬口 2021を縮小)

<p>諸磯/浮島土偶型式</p>	<p>獅子之前土偶型式</p>	<p>花類下層、黒灰式併行 前期初頭～中葉</p>
		<p>諸磯 a 式、諸磯 b 式古 前期後葉</p> <p>諸磯 b 式中、諸磯 b 式新</p>
	<p>諸磯 c 式 十三蕃提式</p>	<p>前期末葉</p>
	<p>井沼方土偶型式</p>	<p>花類下層、黒灰式併行 前期初頭～中葉</p>
	<p>諸磯 a 式、諸磯 b 式古 前期後葉</p> <p>諸磯 b 式中、諸磯 b 式新</p>	<p>前期末葉</p>
	<p>諸磯 c 式 十三蕃提式</p>	<p>前期末葉</p>

第5図 縄紋時代前期土偶編年案（近江 2023を縮小）

つ、「扇形の開きが弱いこと、土偶の表裏面に文様を施文すること」を根拠として、花積下層式に相当する可能性を指摘した（第5図）^{（註7）}。大曲輪土偶型式について初めて編年観を示したものであり、この資料に具体的な型式学的所見を示したおそらく唯一のものである。

その他の前期土偶研究においても、石揚資料は頭部穿孔土偶（所謂「大曲輪土偶型式」）の範疇で捉えられること、時期は前期初頭に当たるとしており、異論は発出されていない。しかしながら、根本的な問題が残されている。大曲輪土偶型式とされる資料の主たる分布域は関東西部から中部地方であり、時期も前期中葉から後葉である。唯一石揚資料だけが極端に古く前期初頭に遡ることになる。しかも先行する資料も後続する資料も関東東部では確認されておらず、時期、分布とも孤立した存在のように見える。さらに事情を複雑にしているのは、先述した通り後世の遺構の覆土に流れ込んだものであり、供伴資料からの検証が困難な点にある。遺構の主体は花積下層式であるが、黒浜式の竪穴住居跡も検出されている。この土偶が大曲輪土偶型式のものであるなら、分布はともかく時期については黒浜式期の方が他資料との整合性がとれるのではないか。今回の再検討の直接の理由は以上の仮説の解明である。

4 関東地方の前期前半土偶の状況

改めて石揚資料を観察すると、①頭部に穿孔があること、②有文であること、③乳房表現があることの3点が特徴として挙げられる。このうち、①についてはまさに大曲輪土偶型式を特徴付けるものであるが、それ以外の②③については他の大曲輪土偶型式資料では認められない特徴である。そこでまずは文様について検討する。

整理作業当時、施されている場所が頭部ほぼ中央であることから口の表現ではないかと推測し、報告書にもそのようなニュアンスの記述をした。管見に触れる限りこの点について、賛否共に指摘はない。しかし、そもそも前期前半の土偶において具象的な顔面表現があるものは全国でも皆無である。系統が辿れないことが問題なら、全国どこにも事例がないものと解釈するのもっと問題であろう。そこで別の可能性、具体的には土器の文様に倣った可能性を考えた。第1図3～16は石揚遺跡から出土した花積下層式土器のうち、土偶の文様と関連あると考えられる資料を掲載したものである。該期に特徴的なループ状の撚糸側面圧痕と周縁の放射状短沈線は、土偶の中央部にあるモチーフの基になっている可能性は十分考えられる。裏面の斜行沈線も、土器の網状文あるいは鋸歯状集合沈線から引用されたと考えることもできる。ただし見た目はよく似た網目状撚糸文は黒浜式土器でも施文されるので、時期を決定づける根拠にはし難い。一方、石揚遺跡から検出された黒浜式の住居跡から出土している土器は、単節縄文や無節縄文を多段に施文するものや、附加条縄文を施文するもの、棒状工具による斜格子状沈線など、シンプルな文様の深鉢が大多数で、黒浜式でも後葉に位置付けられるものであり、土偶の文様と直接結びつくモチーフは見出せなかった。遺構外土器の出土量も花積下層式土器に比べ圧倒的に少なく、遺跡の主体的な時期とは言えないことは明白である。

それでは同時期の土偶はどのような状況であろうか。まずは近隣の遺跡から検討した。佐倉市間野台貝塚からは黒浜式期の土偶が出土している（第6図1）。板状で上下を欠損するが、腕表現がある。半截竹管による横位の沈線で上下を区画し、表裏とも頭部側に波状の沈線を施す。表側胴部は乳房表現があり、中央には半截竹管の押引による正中線が描かれる。施文法については半截竹管を多用するなど黒浜式の土器に特徴的な施文であり、モチーフ的には石揚の資料との共通性はほとんど無く、時期の違いを示してい



第6図 関東甲信地方の前期前半主要土偶 (S=1/3)

と言える。この資料については井沼方土偶型式に位置付ける見解が多いが^(註7)、井沼方土偶型式は稀装飾のものがほとんどである。間野台貝塚資料は明らかに過装飾であり、土器文様転写が認められる点でも井沼方土偶型式の中では異例と言え、石揚資料と共通する要素がある。

白井市一本桜遺跡からは岩偶が出土しており、黒浜式期とされている(第6図2)。方形の板状礫を素材とし、中央に円孔が穿たれ上部両端が浅い皿状に削られている。土偶も含めてこうした形状の資料は関東東部では確認されていない。もちろん石揚資料とも共通性はほぼ無いが、先行するものも後続するものも認められない点では似た位置付けである。市川氏は東北地方の大木5・6式期段階の糠塚型との類似性を指摘しており、「異系統型」としている^(註4)。

千葉以外の関東東部では、栃木県佐野市のムジナ塚遺跡で黒浜式期の土偶が出土しており、無文で乳房表現と臀部表現がある(第6図3)。関東西部に目を向けると前期前半の土偶としては、埼玉県さいたま市の大古里遺跡や井沼方遺跡の資料が代表例である。大古里資料は前期初頭の花積下層式期と位置付けられ、無文で乳房表現が認められる(第6図4)。井沼方資料は関山式期で、肩の部分に沈線が施されるが全体としては稀装飾といえる(第6図5)。これらに対し花積下層式期と考えられる東京都板橋区前野田向遺跡出土資料は、肩の沈線が井沼方資料と共通するほか、全体に爪形文が施される点が特徴的である(第6図6)。なお、頭部は欠損しているように見えるが、原典では欠損か元々無かったか不明としている。ここまでの4点は、文様の多寡の違いはあるものの井沼土偶型式の範疇で理解される。さらに西に目を向けると、山梨県笛吹市の釈迦堂遺跡からは前期土偶がまとまって出土しているが、黒浜式期併行の竪穴住居跡から無文の大曲輪土偶型式の資料が出土している(第6図7)。石揚資料とは形状が大きく異なって

おり、両者の時期が異なることは明らかである。大曲輪土偶型式については前期後葉の諸磯式期になると関東西部で多く出土するようになるが、本稿の範囲から外れるため省略する。

以上をまとめると、石揚資料は花積下層式期である可能性が高い一方で、黒浜式期である根拠に乏しいということになる。一方で過装飾というべき有文土偶、特に土器文様を転写する事例は、大曲輪土偶型式、井沼方土偶型式ともごく少数であった。すなわち石揚資料だけでなく、間野台貝塚資料の特異性も浮かび上がってきたことになる。そして一本桜資料も、在地の資料では系統が辿れないという点については特異な存在と言える。さらにこの3点については、大きさの点でも他地域のものに比べ大形であることが特徴である。下総台地に限ると前期前半の土偶・岩偶は、同時期の関東地方他地域のものと比較して、かなり異質なものであることが示されたと言える。

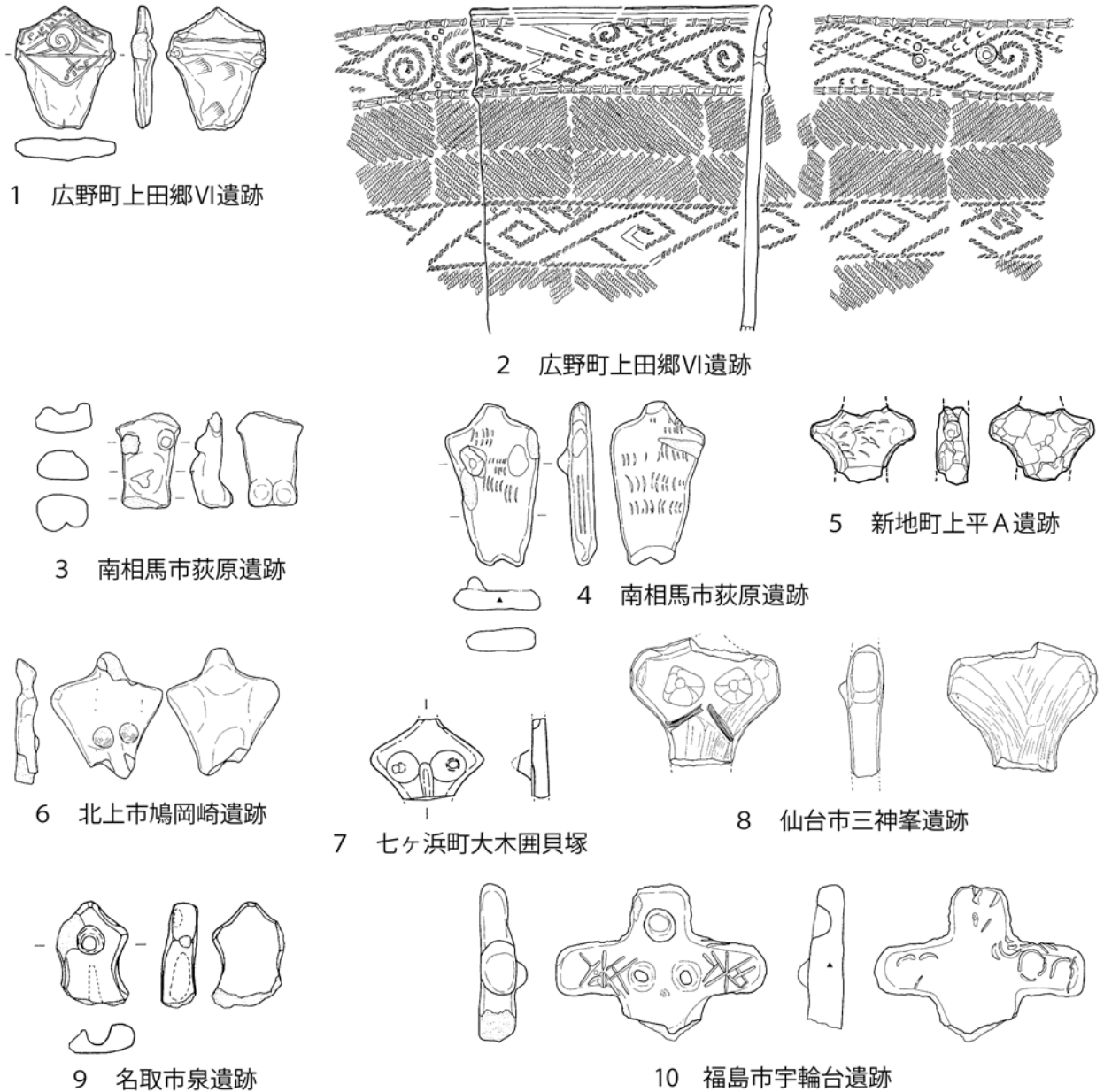
5 他の土偶型式からの影響

石揚資料の特異性をどう考えるか。関東・中部地方の土偶型式で説明が難しいなら、別の土偶型式からの影響を検討する必要があるだろう。そこで鍵となると思われるのが東北地方の大木式土器文化圏から出土している土偶である。検討してみたい。なお、各資料の時期については折登亮子氏の研究を参考としている^(註8)。

前期前半の土偶は無文が多いが、加飾を施すタイプも存在する。特に注目すべき事例として、福島県広野町上田郷Ⅵ遺跡出土土偶が挙げられる(第7図1)。前期初頭の遺物包含層から出土している。板状を呈するもので、上部が三角形、下部が逆台形を組み合わせたような形状である。上部側中心に沈線による渦巻きを配し、外側に平行沈線と充填する短沈線、刺突列を配する。前期初頭の上川名式土器に認められる撚糸側面圧痕のモチーフを沈線で表現したものであり、該期に相当する資料と判断される。土器の代表的な資料を第7図2に掲載した。前期初頭の上川名式に相当するものであるが、口縁部文様帯の撚糸側面圧痕のモチーフが、ほぼそのまま土偶に描かれている。

大木式土器文化圏における前期前半を中心とした土偶を瞥見する。主に東北地方の太平洋側に分布の中心がある。福島県南相馬市萩原遺跡からは2点の土偶が出土している。第7図3は無文で頭部を欠損するが、乳房、腹部、臀部が強調される。早期末～前期初頭の竪穴住居跡から出土しており、該期と判断される。第7図4は上田郷Ⅵ資料と平面形状は類似するが、表裏とも横位の連続爪形文が多段に配されるのが特徴である。乳房表現が認められる一方で、顔面は表現されない。これも早期末～前期初頭の竪穴住居から出土しており、該期と判断される。福島県新地町上平A遺跡出土資料は胸部以外を欠損するが、形状は上田郷Ⅵ資料と同様のものと思われる(第7図5)。こちらも爪形文が施されるが、表面側のみで散発的な縦位施文である。岩手県北上市鳩岡崎遺跡出土資料は下半身を欠損し、無文の板状で乳房表現が認められる(第7図6)。宮城県七ヶ浜町大木田貝塚出土資料も胸部のみで、文様は施されないが乳房表現と正中線が認められる(第7図7)。宮城県仙台市三神峯遺跡出土資料も胸部のみで、無文であるが乳房表現があり、乳房の下側には斜行沈線が配される(第7図8)。以上の5～8は大木1式期と考えられる。大木2式期になると頭部もしくは胴部中央に円形文を配するものが登場する。宮城県名取市泉遺跡出土資料は、形状は先行する資料を踏襲し、中央に円形文が配されるが乳房表現や文様はない(第7図9)。一方福島県福島市宇輪台出土資料は円形文が配されるが、乳房表現が残り沈線による装飾も目立つ(第7図10)。

市川氏は先述した論文で東北地方の前期土偶についても分析しており、大木式土器文化圏の土偶を「鳩



第7図 東北地方の早期末～前期前半主要土偶及び関連資料（2はS=1/6、他はS=1/3）

岡崎型」「糠塚型」「大木型」などと定義付けている^(註4)。これらのうち鳩岡崎型は前期初頭から出現し、立体的な胸部構造を特徴とする。無文が多いが加飾タイプも存在する。糠塚型は胸部・腹部など体の中心部分に円形文を持つものとしており、鳩岡崎型と同時存在しながら複線的に変遷を辿るとしている。ここで挙げた資料のうち萩原遺跡や上平A遺跡の資料などは、鳩岡崎型の加飾タイプに該当すると思われる。糠塚型は鳩岡崎型からの流れで捉えることができるが、泉資料のように装飾が無いものと宇輪台資料のように過装飾のものが成立当初から存在している点は注目すべきである。翻って上田郷VI資料を考えると、形状は鳩岡崎型に準じるが乳房表現が無く、土器の文様をかなり忠実に転写している点でかなり特異な存在と言える。なお、中央の渦巻きを円形文の祖型と見做すこともでき、宇輪台資料は上田郷VI資料からの影響下で成立した可能性も指摘できよう。

以上の検討結果から石揚資料を考察すると、有文であること、乳房表現があることといった点において、



第8図 東北・関東地方の早期主要土偶 (S=1/3)

鳩岡崎型を主とした大木式土器文化圏の土偶との関係を認めることができる。特に上田郷VI資料は同時期であり、土器の文様を転写している点で石揚資料とのつながりを見出すことができる重要な資料である。また、間野台貝塚資料についても同様の理由で鳩岡崎型との関係が認められ、土器の文様を転写している点でも石揚資料と共通しており、後続するものと判断される。そして一本桜資料が明らかに糠塚型の影響を受けていることを併せると、前期前半において下総台地方面では大木式土器文化圏の土偶の関係が強かったことを示している。

6 大曲輪土偶型式の成立

石揚資料が大木式土器文化圏の土偶とのつながりが認められる点を指摘したが、もう一つの問題が残されている。この土偶が大曲輪土偶型式に属していることの根拠とされる頭部の穿孔である。時期についての検証が前述通り花積下層式期であるとするならば、改めて大曲輪土偶型式の初源が石揚資料であることを示すこととなり、振り出しに戻った形となる。その成立をどのように考えるかについて、前段階の土偶から検討したい。

千葉を中心とした関東東部においては早期前葉の撚糸文期に土偶製作の画期があったことが知られ、ヴァイオリン形を呈する花輪台土偶型式と、逆三角形もしくは三角形を呈する木の根土偶型式が認められる。花輪台土偶型式の代表例として茨城県利根町花輪台貝塚資料を(第8図1)、木の根土偶型式の代表例として成田市木の根拓美遺跡資料を挙げておく(第8図2)。早期中葉になると土偶製作は下火となるが、花輪台土偶型式に特徴的なヴァイオリン形の形状は庚塚土偶型式に継承される。ただし無文もしくは

稀装飾であった花輪台土偶型式と異なり、庚塚土偶型式は土器の文様をほぼそのまま転写するのを特徴とする。型式名となった成田市庚塚遺跡などの事例が知られる（第8図3）。この土偶型式は撚糸文期に比べ大形化するものが多いが、小形のままの資料も存在する。袖ヶ浦市打越岱遺跡出土資料はその例である（第8図4）。当地は沈線文期土偶分布圏の南端部にあたり、庚塚土偶型式の影響があまり強くなかったかもしれない。さらに沈線文期にはこれらとは別に、円形を呈し無文ながら明瞭な乳房表現があるものが確認されている。今のところ成田市名木鎌部北遺跡から出土した2点だけであるが、そのうち1点は頭部に1箇所穿孔が認められる（第8図5）。この遺跡以外出土例が知られていないため型式名を与えられるに至っていないが、木の根土偶型式の後継に当たる可能性を指摘しておきたい。頭部の穿孔は木の根土偶型式に顕著に認められる縦位置のピンホール状穿孔が転化した可能性がある。

その後早期後葉は土偶の空白期となってしまい、前期初頭の石揚資料とは時間的隔たりがやや大きいのが気になるところであるが、庚塚資料の土器文様を転写する点と、名木鎌部北資料の明瞭な乳房表現を持つという双方の特徴が石揚資料には表出されており、地域的にも近接していて系譜を追えるものとする。特に名木鎌部北資料で頭部穿孔が認められる点は重要であろう。

北方に目を転じると、沈線文期の土偶として茨城県城里町片根山遺跡（旧称二本松遺跡）出土資料が挙げられる^(註9)。この資料は逆台形の板状で頭部が突出し、中央部と両端部に円形刺突を加えるものである（第8図6）。庚塚土偶型式に共通する土器文様の転写が認められる一方、打越岱資料と比べてもさらに小形であり、同一系譜上に位置付けていいか躊躇される。東北地方では早期の資料はごく少なく、前葉は皆無、中葉になって出現するがほとんどが青森県に集中する。代表例が貝殻沈線文期の青森県三沢市根井沼遺跡出土資料で、土器の施文法による装飾が認められる一方、こちらも極めて小形である（第8図7）。時期が下って早期後葉になると、大木土偶型式の祖型と考えられるものが東北中央部に出現する。岩手県奥州市休場遺跡の資料はその例で、頭部を欠損するため詳細は不明であるが、無文で板状を呈し腹部が立体的に表現される（第8図8）。先述した萩原資料（第7図3）に先行するものと考えられる。

以上の関東北部から東北地方の状況から石揚資料を見ると、前項で述べたとおり形状や表現などで影響が認められる一方、大きさの点において庚塚土偶型式に匹敵するものは東北地方では確認されない。また、土器文様の転写も東北北部の貝殻沈線文土器の文化圏で認められるものの、それ以南は片根山資料まで空白となっており直接の影響を考えるのは難しい。早期後葉の休場資料からも直接の影響はうかがえない。石揚資料が基本的には在地の土偶型式下で成立したことを如実に物語ると言える。

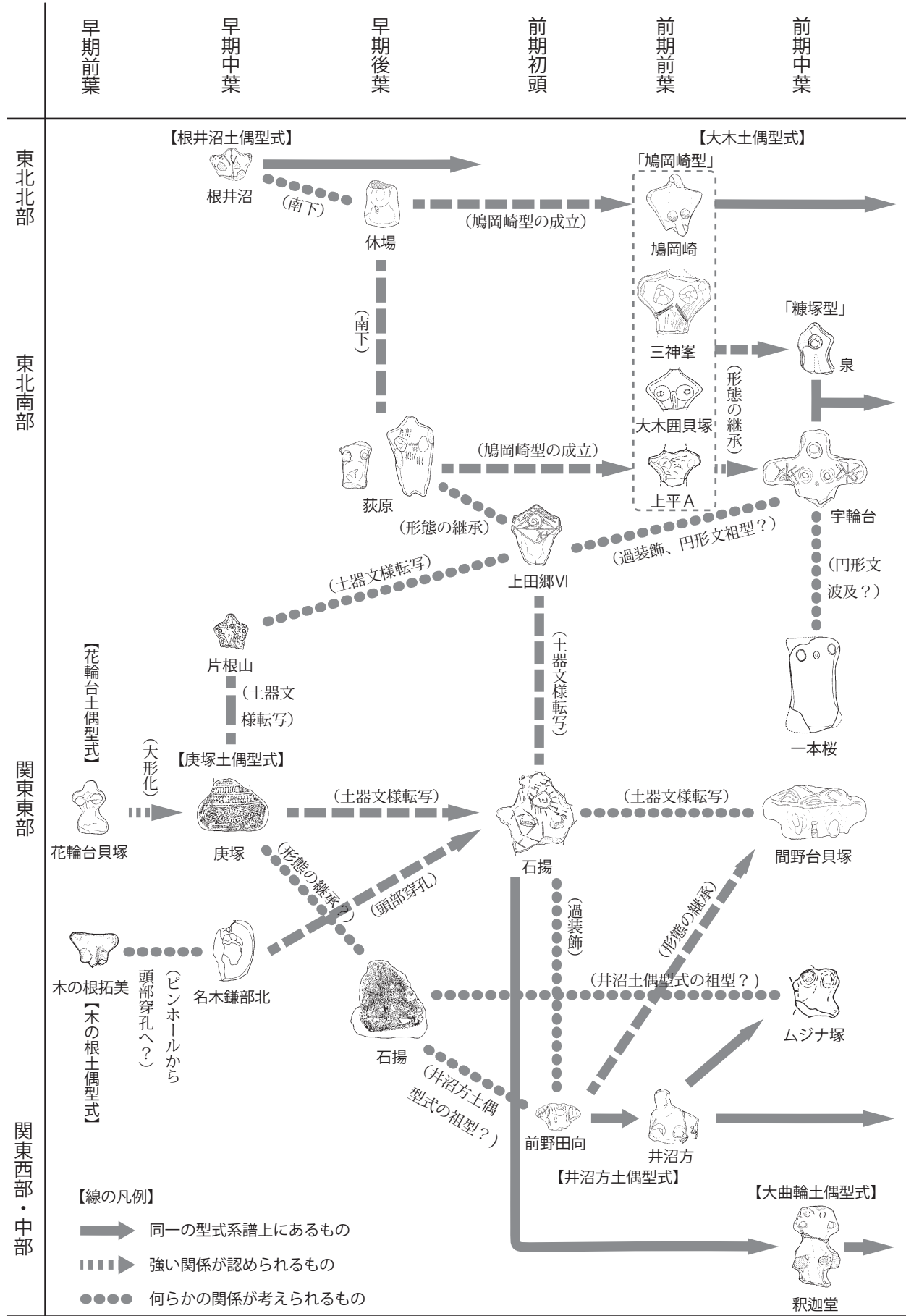
なお、瀬口氏はやはり早期土偶からの系譜で石揚資料に対し考察を加えている^(註6・10)。氏はまず初期土偶を顔面表現がある甲類と欠落する乙類に分類し、乙類のうち突出した頭部の縁に沿って円孔が列状に付加されるものを凸式Hとした上で、その最古のものとして石揚資料を位置付けている。この乙類凸式Hは、早期中葉から後葉に出現する乙類凸式Eを祖型とするものとしており、その代表例として片根山資料を位置付けている。片根山資料の円形刺突が石揚資料の穿孔の祖型に当たるものとするのが瀬口氏の見解である。この説の問題点として、円形刺突の施文モチーフと穿孔を同じ系譜上に位置付けていいかという点と、スケール感の違いという点にある。第一点について、土器文様の転写から発生した片根山資料の円形刺突に対し、石揚資料の穿孔は土器文様との関連は認められない。その点を踏まえた上で、穿孔とは何なのか考える必要がある。かつて原田氏は撚糸文期の土偶に認められるピンホール状穿孔に対し象徴的な意味を推察したが^(註11)、検証は難しいものの穿孔という行為が土偶を性格付ける上で重要な要素であることは

間違いない。名木鎌部北資料には土器文様の転写がないのに穿孔がある点はそのことを示しており、必然的な理由があったと考えるべきであろう。可能性の一端として撚糸文期土偶のピンホール状穿孔からの転化を指摘したが、背景として原田氏が推察したところの象徴的な意味があったかもしれない。ちなみに瀬口氏は大曲輪土偶型式だけでなく、糠塚型などに認められる胴部中央の円形文や、大木囲型に特徴的な刺突充填なども乙類凸式Eからの派生と捉えている。形状は同じ円形でも穿孔か刺突か押圧かでそれぞれ意味が異なるはずで、峻別する必要があるように思われる。ただし土器文様の転写という点では片根山資料の北方への影響は十分考えられ、特に上田郷Ⅵ資料に影響を与えたように思われる。糠塚型の円形文も片根山資料から直接成立したと考えるより、上田郷Ⅵ資料を経由して成立したと考える方が自然であろう。一方石揚資料と片根山資料とでは距離のハードルは低くなるが、土器文様転写という技法の伝播を追うなら庚塚土偶型式から片根山資料への系譜を考えた方が自然と思われる。第二点のスケール感であるが、繰り返し述べるように石揚資料をはじめとする千葉県出土の前期前半の土偶は他地方のものに比べ大形であるのが特徴で、これは大形化した庚塚土偶型式の影響と考えられる。片根山資料は小形のままで、同時期で距離が近い宇都宮市山崎北遺跡や同市大志白遺跡などの資料と比較しても小ささが際立つ。技法の伝播があったとしても、系譜としては別のものとせざるを得ないと思われる。

7 東北・関東地方の初期土偶の変遷

ここまでの検討を基に作成したのが第9図で、東北地方から関東地方にかけての早期から前期前半の土偶の変遷をまとめてみた。東北北部では早期中葉の根井沼土偶型式が継続するが、早期後葉にこれらが南下し、休場資料を経て早期末の荻原資料に至る。これらを土台として大木土偶型式(鳩岡崎型)が成立する。大木1式に相当する大木囲貝塚資料や三神峯資料など、東北中央部を中心に定形化した状態を保つ。市川氏は東北地方の前期土偶について、大木式土器文化圏の範囲とほぼ分布を同じくして「定形化」しており、「形式ごとにまとまりをもっているのが特徴で、どの形式にも属さないような形のはほとんどみられない」として、大木式土器文化圏内での自律的変遷が特徴であるとしている^(註4)。一方で土器の文様をそのまま描写した前期初頭の上田郷Ⅵ資料が出現するが、形状は在地の土偶の系譜に拠るものの、関東の早期土偶の影響が考えられる。大木2式期における糠塚型成立には、この上田郷Ⅵ資料が関与した可能性がある。関東地方では早期前葉の花輪台土偶型式が早期中葉の庚塚土偶型式へ変遷し、大形化と過装飾化が顕著になる。同じく早期前葉の木の根土偶型式の消長は今のところ不明であるが、名木鎌部北資料がその系譜を引き継いでいる可能性がある。その後、早期後葉の空白期間を経て、花積下層式期の関東東部に最初の大曲輪土偶型式が成立する。土器の文様を描写するという点では庚塚土偶型式の伝統を引き継ぎ、頭部穿孔は名木鎌部北資料を初源とする。関東西部では前期初頭に井沼方土偶型式が成立した後、関山式期以降に土偶製作の中心は関東西部及び中部地方に移り、井沼方土偶型式と大曲輪土偶型式とが併存する形となる。一方で関東東部においては井沼方土偶型式をベースとして東北地方の影響を受けたものが散発的に出現する状況となり、独自の土偶型式は認められない。各資料の相関関係は図のようになるが、特に破線部については資料数が少ないこともあり根拠に乏しいものもある。今後さらに検討が必要である。

最後にここまで全く触れてなかったが、第1図2の資料について若干考察したい。はじめに性格不明土製品として紹介したが、形状などを見る限り土偶である可能性が強いと判断する。表面に貝殻条痕による調整が認められることから時期は早期後葉であろう。顔面は欠落し乳房表現も認められないが、下端部が



第9図 東北地方から関東地方にかけての早期～前期前半の土偶の変遷 (S=1/5)

張り出していることから臀部表現と見做すことも可能であろう。庚塚土偶型式に後続するものと考えられ、前期の井沼方土偶型式に先行すると考えるのが妥当と思われるが、井沼方土偶型式の最初期に当たる大古里資料や前野田向資料と比べると大きさの点で落差がある。時期はやや隔たるが井沼方資料やムジナ塚資料とは大きさや形状の点でも違いは少ない。ただし板状を呈する井沼方資料と、臀部表現のあるムジナ塚資料とでは系譜が異なるようにも見え、関東東部における大形化した井沼土偶型式の諸様相を示すものかもしれない。

8 おわりに

資料数が絶対的に少ない前期土偶においては、系譜を辿るのに著しく困難を伴う。先行型式や後続型式に相当する資料の不在、或いは地理的・時間的隔たりなど、中期以降の土偶では大きな障害にならない問題について、様々なアプローチが要求される。今回の分析に当たって、主に装飾の度合い（土器文様転写の状況）と大きさを手掛かりに各地の土偶の系譜を辿ってみた。勿論それが土偶を性格付ける上で重要な要素であると考えたからに他ならないが、具体的にどのような要素を示しているかについて明確な回答は得られていないものの、土偶型式の系譜を辿る上で重要な手掛かりになることが今回確認されたのは大きな成果であった。早期前葉に安定した土偶型式を保っていた関東東部がやがて流動化し、前期になって東北地方と関東西部において再び安定化した土偶型式を成立させるに至るまでの変遷を、不完全ではあるが見通せたと考える。大曲輪土偶型式について推測すると、早期以来の土偶型式の系譜のもと、前期初頭の関東東部で生成され、前期中葉以降関東西部や中部・東海地方に伝播したと考えられる。伝播の具体的状況については不明な点が多いが、汎地域的な土偶型式であり強い影響力を保ったことが前期後葉の状況から理解される。なお、型式名の由来となっている大曲輪資料も先行ないしは後続する資料は東海地方において見出せず、ある種石揚資料と似た位置付けにある。石揚資料から前期中葉に釈迦堂資料へ伝播した大曲輪土偶型式が、前期後葉に拡散したその西端が大曲輪遺跡だったと考えるのが妥当であろう。

もう一つの問題点として、なぜ大曲輪土偶型式が関東東部に定着しなかったのかという点がある。かつて原田氏は撚糸文土器を研究する中で、竪穴住居の分布と土偶の出土状況に著しい違いがあることを指摘した^(註12)。同じ撚糸文期でも竪穴住居の多い関東西部では土偶は皆無で、相対的に少ない関東東部に土偶が集中する。具体的要因について原田氏は「いまだ明確な答えを出せていない」^(註13)と慎重な姿勢を示しているが、少なくともその時期から土偶を必要とする社会と、必要としない社会が出現していたことを示すと考える。石揚遺跡以降の関東東部は、集落遺跡が増加し明らかに人口増加が認められる一方、土偶は先述した通り大木土偶型式の影響を受けながらも安定した土偶型式は出現せず、そのうち土偶そのものを製作しなくなる。土偶を必要としない社会に移行したと考えられ、これは遙か先の後期前葉まで続くこととなる。土偶を必要とする社会、必要としない社会の有り様はそれぞれ如何なるものだったのか、原田氏の指摘は初期土偶に限った話ではなく、縄文社会における土偶の位置付けそのものについて考察を巡らせる必要性を指摘するものであり、今後の土偶研究上で重要な課題と言える。

本稿は当初石揚資料を検討する中で、大曲輪土偶型式の変遷についても分析する腹積もりであった。しかし結果として成立に関わる部分が主題となってしまう、その後の変遷については検討できなかった。また、主に東北地方との関係を中心に据えたため、中部・東海地方の早・前期土偶との関係についても論じることができなかった。機会を改めて取り組みたい。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、下記の諸機関、個人にお世話になりました。また、千葉縄文研究会各位、土偶研究会各位からも多大なるご協力を頂きました。記して謝意を申し上げます。

佐倉市教育委員会 釈迦堂遺跡博物館 千葉県教育庁教育振興部文化財課 千葉県立中央博物館 千葉県立房総のむら
名古屋市教育委員会 南山大学人類学博物館 福島県文化財センター白河館

伊藤正人 猪股佳二 内田龍哉 近江哲 大谷弘幸 折登亮子 瀬瀬茂 小林裕美 佐賀桃子 高橋圭子 鶴見諒平 野
口行雄 林亮太 原田昌幸 樋田泰之 福田秀生 松田富美子 山元出 (50音順)

註

- 1 太田文雄、安井健一 1994「第2章 縄文時代」『石揚遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 2 安井健一 2023「東関東の初期土偶」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会
- 3 原田昌幸 1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
- 4 市川恵子 1999「縄文時代前期土偶の再検討」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
- 5 瀬口眞司 2015「初期土偶の根本的性質と展開過程」『古代文化 第67巻3号』(公財)古代学協会
- 6 瀬口眞司 2021「土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論」『紀要第34号』(公財)滋賀県文化財保護協会
- 7 近江 哲 2023「前期土偶の様相と変遷」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会
- 8 折登亮子 2023「北海道・東北地方の初期土偶」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会
- 9 片根山遺跡出土資料について、著者の以前の発表^{註2)}では縮尺が誤っていた。本稿の実測図が正しい縮尺である。お詫
びして訂正したい。
- 10 瀬口眞司 2018「前期土偶の根本的性質と展開過程」『紀要第31号』(公財)滋賀県文化財保護協会
- 11 原田昌幸 1983「発生期の土偶について－花輪台貝塚出土の新資料から－」『奈和 第21号』奈和同人会
- 12 原田昌幸 1991『考古学ライブラリー61 撚糸文系土器様式』(株)ニュー・サイエンス社
- 13 原田昌幸 2023「基調講演 初期土偶についての諸問題」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会

実測図引用文献

- 第6図1 喜多裕明 1996「第2章 検出した遺構と遺物」『千葉県佐倉市間野台貝塚』(財)印旛郡市文化財センター
- 同図2 中山吉秀 1973「第2篇 調査の概要、印西(西)地区、4 一本桜遺跡(CN401,402)」『千葉ニュータウン埋蔵
文化財報告書Ⅱ』(財)千葉県都市公社
- 同図3 上野修一 2010「栃木県内出土の土偶－早期～中期資料の紹介－」『第7回土偶研究会栃木県大会資料』土偶研
究会
- 同図4 原田昌幸 1997「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
- 同図5 青木義脩 1991「井沼方遺跡」『浦和市史 考古資料編(続編)』浦和市
- 同図6 中村 大 1995「前野田向遺跡」『板橋区史 資料編1 考古』板橋区
- 同図7 小野正文他 1986「山梨県東八千代郡一宮町塚越北A地区」『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会
- 第7図1・2 井 憲治他 2001「第3編 上田郷Ⅵ遺跡(2次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告22』(財)福島県文化セ
ンター
- 同図3・4 香川慎一他 2010「第1編 萩原遺跡(3・4次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告59』(財)福島県文化振興
事業団
- 同図5 坂田由紀子他 2003「第2編 上平A遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告37』(財)福島県文化振興事業団
- 同図6 相原康二・鈴木優子 1982「第2部 調査の結果 (A) 縄文時代」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告
書XV-1』岩手県教育委員会
- 同図7 藤沼邦彦 1992「宮城県出土の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集 土偶とその情報』国立歴史民俗博物館
- 同図8 岩渕康治 1980「4. 調査内容 (6) 過去の未報告遺物 A. 土偶」『仙台市富沢三神峯遺跡発掘調査報告書』

仙台市教育委員会

- 同図9 相原淳一 2008「宮城県の土偶(3)」『第5回土偶研究会発表資料』土偶研究会
- 同図10 丸山泰徳、安中 浩、秦 文夫 1993「第3章 調査成果」『第三期山林振興農林漁業対策事業水原小谷地区農道改良工事関連遺跡発掘調査報告 宇輪台遺跡』(財)福島市振興公社
- 第8図1 吉田泰幸 2010「花輪台貝塚土偶をみる」『南山大学人類学博物館紀要第28号』南山大学人類学博物館
- 同図2 宮 重行他 1981「第3篇 No.6遺跡、第3章 縄文時代」『木の根－成田市木の根No.5、No.6遺跡発掘調査報告書－』(財)千葉県文化財センターを改変
- 同図3 石橋宏克他 1987「第1篇 庚塚遺跡 (No.17-2)」『東関東自動車道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』(財)千葉県文化財センター
- 同図4 大河原務 2018「Ⅱ 検出された遺構と遺物」『千葉県袖ヶ浦市打越岱遺跡(4)』袖ヶ浦市教育委員会
- 同図5 薮 淳一 2015「第4章 名木鎌部北遺跡」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書26』(公財)千葉県教育振興財団
- 同図6 原田昌幸 1987「縄文時代の初期土偶」『MUSEUM No.434』東京国立博物館
- 同図7 田島一雄 1987「第4章 遺構外出土遺物 第3節 土偶」『根井沼(1)遺跡 発掘調査報告書Ⅲ』三沢市教育委員会
- 同図8 平めぐみ 2000「Ⅳ 検出された遺構と遺物」『休場遺跡発掘調査報告書』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

その他の参考文献

- 小笠原好彦 1984「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究 第1巻 考古学篇』(株)清文堂出版
- 原田昌幸 2007「土偶の多様性」『縄文時代の考古学11 心と信仰』(株)同成社
- 原田昌幸 2010『日本の美術No.526 土偶とその周辺Ⅰ (縄文草創期～中期)』(株)ぎょうせい
- 伊藤正人 2018「5 縄文時代の土器・土製品」『埋蔵文化財調査報告書80 大曲輪遺跡』名古屋市教育委員会
- 近江 哲 2022「縄文時代前期における土偶研究の現状と課題～関東・中部地域～」『千葉大学文学部考古学研究室 考古学論攷Ⅲ』千葉大学文学部考古学研究室
- 伊藤正人 2023「東海以西の初期土偶」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会
- 佐賀桃子 2023「西関東・甲信越地方の初期土偶」『第19回土偶研究会千葉大会』土偶研究会

